WASON
2
104
274+

女學雜誌

第二百五十六號
明治二十四年三月十四日發兌

乙女の心情　中島俊子
岡山孤兒院
殖民上の偉人物
佐倉宗吾妻
婚姻の理想　雲峯子

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 256. MARCH, 14TH. 1891.

EDITORIAL :—A great Colonizar.
WORDS AND DEEDS :
MISCELLANEOUS :—The Wife of Sakura Sogo. (Yenchishi). Orphan's Assylum at Okayama (Ashikawa.) The Maiden's Heart. (Nakashima Toshiko.) An Interview with Count Katsu (Cont.) (Fumiko.)
NOVEL :— "Fuunkio."
PHYSIC :—Why is it hot at the Equator and Cold at the Poles. The Change of temperature between day and night. The warmest time during a day, &c., &c.
CHILDREN'S COLUMN :—"A little Hero," (Yukiko.)
HUMOUROUS :—The Sparrows of "Kangakuin" (Fumiko.)
LITERATURE :—Japanese Poems. (Anzanshi no ya.)
HOUSEHOLD SCIENCE :
CRITICAL NOTES :—"The World of Fine Art." (Muzoshi) "Yamabuki zuka."
CONTRIBUTED ARTICLES :—With tears, I appeal to my brothers and sisters! (Miyoshi no ya Shujin.)
NOTES AND NEWS.
QUESTIONS AND ANSWERS.
CORRESPONDENCIES.
CONCERNING WOMEN.
WEEKLY REPORTS.
THE PRICES OF CERTAIN ARTICLES.

第二百五十六號目次

社説 言行 雜録 小説 理學

殖民上の偉人物
佐倉宗吾の細君（天知子）○岡山孤見院（蘆川子誌）○乙女心の情（中島さし子）○勝伯を訪ふの記（ふみ子）
浮雲胸（雲峯子）
赤道は熱く、南極の寒きは何故か○晝夜に寒暖ある譯○一日中尤も暑きは何時なるや○仝最も寒きは何時なるや○一年中にて最も暑き時○又寒き時○氣象の變化は何に由りて生ずるか（小絲）

兒籃 笑草 文學 家政 批評 隨感 寄書 時事

幼なき英雄（ゆき子）
勸學院の雀（ふみ子）○
和歌數首（案山子家社中）
美術世界（撫象子）○山吹塚○標注榮花物語（雲の舍主人）
婚姻篋（方寸子に次す）雲峯子
涙を揮ふて同胞兄弟に告ぐ（美芳野舍主人）
叡慮○今后○帝曲○鄭某○ニコライ派新會堂○醫學士社界の議決○醜業者の撰擧権○女醫○何故に婚姻せざる乎

通信 女報 物價

Suggested Resolutions for the consideration of the General Medical Convention called to consider the practicability of abolishing Prostitution.:—

1st *Individual and public conscience demands the abolishment of Prostitution.*

2nd *Its complete abolishment may not be practicable, but to confine it to certain prescribed limits is not only practicable but necessary, as well.*

3rd *The present state of society is such, that connection with this system is not considered a thing to be concealed, on the other hand, those who practise it are, to a certain degree, respected. Setting a legal and prescribed limit to it will doubtless have the effect of bringing, to some degree, the odium of society upon it.*

4th *The office of go-between of Houses of Prostitution ought to be abolished.*

5th *The Government ought not receive a tax for licensing such houses. Making them a means of revenue to the Government ought to be unequivocally condemned.*

6th *The evasion of the law, which provides for the inspection of such houses by a medical examiner, tends in a frightful degree to the spread of loathsome diseases.*

7th *A certain territory, out side the city limits, ought to be set aside for these houses, and, they ought to be kept under strict medical supervision.*

8th *All found guilty of the violation of the law in not submitting to such inspection, ought to be subject to punishment.*

9th *Those, who are found guilty three times of flagrant violation of the law, ought to be compelled to submit to the proscriptions recommended in Art. 7th.*

10th *All such houses ought to be visited, at least once a week, by the Medical Inspector, and, if disease is discovered, such patients ought to receive medical treatment in the Public Hospital, gratuitously.*

11th *All, who practise the crime of Prostitution outside of the prescribed limits in Art. 7th, ought to be subject to the same supervision and inspection, and, if disease is discovered, ought to receive treatment according to Art. 10th.*

12th *Society, in general, ought to be encouraged to look with pity on the inmates of such Houses. Every means of conversion and inducements to lead better lives ought to be opened to them.*

13th *Those, who for lack of means, are likely to be driven to such practies as a means of subsistence, ought to be taught some useful work, and the way of self support opened to them. Such benevolent undertakings would, no doubt, lessen, to a great extent, the number of the inmates of such houses.*

14th *As a means of discouraging this great social evil, the youth of the country should be encouraged to meet in chaste, correct converse, and upright, social relations between the sexes ought to be inculcated.*

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百五十六號 明治二十四年三月十四日發兌

社説

殖民論（中）

失念せられたる二大事件

徳川氏鎖國の政策を執り、民情久しうして殆んど一變しぬ。今に於て日本人は移住的の國民なりと云ふもの恐らくは稀なるべし。左れど、日本人は素と海を渡りて此土に移住したるものなれば、亦た海を超えて彼岸に航するを以て左程の遠征と思はず、寧しろ歸るが如きの戀情を懷きて海外に往來したるの例し、史上に歴然たり。試みに、日本初代の航海を見よ、船艦堅牢なりしにはあらず、操艫敏妙なりしにはあらず、一葉の輕舟蕩々波に動きて木の葉の洪流に漂ふの狀ありしとは云へども、此島國の民不思議にも、閉鎖因循の固陋に慣れず、能く四方に流出して海洋の外に比隣を求めたるの英氣は、今の惰に比べて頗ぶる驚ろくべきものあり。然れども、是れ大和民族の常態にてありける。此を以て、神功皇后、率然師を興して三韓を征服したるより此の方、秀吉戰國の餘弊を以て一呼の下乍まち十五万の遠征軍を集め、比類なき大勢を海より輸たして、八道の膽を驚かせしに至る迄で、日本有爲壯年の志氣は、折にふれて海外遠征の夢を結ばずと云ふことなし。此の故に、血性熱情の大望家しば〳〵孤舟を遣りて支那の海岸を侵し、隻手に唾きして容易く寶珍を收めたるもの極めて多し。彼の國の史上、數たゝび「矮人冦す」の句を掲ぐ、此の短文字は、實に彼に取りて非常久長の難困を意味するものにてありき。鎭西八郎、刑餘の身を以て、一朝乍忽琉球島を吞略し、脈統今に至る迄で、沖繩の結主となる。九郎判官、衣川に死せず、侍臣數人を携へて、蝦夷より莫臥爾に入り、一化して千古卓拔の成吉思汗と稱し、連驅連勝して、清朝の太祖たり。子孫今の支那四百餘州を統撫するなど、古しへの大和民族には珍らしからぬことにてありき。

惜しむべし、三百年間の鎖國政略は、六代の人の思想を世々固陋因循に化成し、習慣固く熟して度量豆粒の如く、腰間の秋水を揮つて外來人を斬れば、日本武士の譽れ此上なきことと誇るに至る。たとへば辨慶に似んことを欲して蔭に七つ道具を

使ひ、炬燵の中に頭まをかくして、天下の英雄は我なりと大言するが如し。あわれむべきと幾干ぞ。それ如何にして此の陋習を打破せん。

維新の聖詔は、天外忽ち光明を降し、三百年の黒雲を排らきて叫破すらく、云はく、陋習を破りて萬國と交通せよ、廣く大道に據つて眞理を天下に求むべしと。即はち是れ、大和民族を古に復へして、内外比隣の大思想を元の如く發揮せしむるの先導なり。老西郷深く此精旨を覺れり、彼が征韓の略を立るものは何んぞ必らずしも功名の私情によるとせん。吾人之を思ふ毎に、彼が偉大の經綸に服するの感なくんばあらず。

日本の殖民政略は、日本人の思想を其固有の本跡に復へし、縮固せる鬱情を伸ばして、其潜勢力を櫻の爛熳たるが如く滿開せしめんとを期圖するに因す。故に、此の殖民政略は、一の外交政略なり、一の大教育方なり、一の振職導民の大經綸なり、日本人が固陋なる觀念は之によりて蹴破され、小島近海の彼方に何ほ日本の地あるとを感じて、度量自から濶大となるべし。此量は即はち、國民に大望心を起さしめ、大競爭の勇を鼓せしめ、眞理を呑むが如くに吸入して、万國の進歩をわが歩みに加ふるの樂しみを振起せしめ、万益之より發せんとす。殊に、日本の地山多くして、耕土住地少なきにも關はらず、居る所ろの民、格外過分に夥たゞしくして、地上殆んど溢んとす、試みに農業國北米合衆聯邦に之を比ぶれば、

合衆國は　一平方英里に付き　十四人の住民あり

日本は　同上に付　二百六十五人の住民あり

もし合衆國を以て廣漠なる田野に比せば、日本は狹隘なる裏店の如けん。住民如斯く塡充せる國柄に於ては、大進歩の見込徹底望むとを得べからざる也。管子云はく衣食足つて禮節を知ると。アダム、スミス云く、餘裕ありて機械生じ、機械ありて餘裕生じ、餘裕ありて民大ひに開化すと。今の日本の形勢に於ては、大器械も到底之を使用するの餘地ある可らず、餘裕も進歩も到底其分に滿るとを望む可らず、斯の如くして、民久しく貧しく長久なへに禮に入らずんば、一國道德の發達も極めて覺束なきとを感ず。

今后の國是は、殖民政略を以て其一と爲さずんばある可らず。世人亦た近ごろ漸やく之に掛念し、氣運將に一變せんとする

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の光あり。論者亦た往々辨ずる所あるが如し。故に吾人は、論理の明白にして且つ世の普ねく傳唱する所ろの事を更めて言わず。此際たゞ二個の大ひに失念せらるゝ所ろの事は擧げて、世上同胞の猛省に供へんとを欲す。

論者云く、速かに殖民省を設くべしと。此語、政府が殖民の事に冷淡なるを責め、其の移住民の上に信切ならざるとを憂ふるの忠告としては、頗ぶる價値あり、吾人も亦た、殖民政畧に對し、政府が一層熱心ならんとを希望す。左れど、此の一語は又た無上の弱點を保合し、殖民の成功を主として政府の手に一任せんとするの度胸を現すに似たり。もし如此くんば、遺憾頗ぶる淺からざるを覺ゆ。相應の保護は固より政府が爲すべきの義務なり、もし之を欠かば、外國に殖民するの偉業は、恐らく功を成すとなけん。吾人もある限りに至る迄は、深く政府の保護を求む。然れども之より以上、所云る殖民の精神となり、之を鼓舞し、之を奬勵し、之を利導する所ろのものは、必らずしも殖民會社にあらず、必らずしも黄金にあらず、必らずしも衣食器具にあらず、現んや必らずしも漠々冷々たる政府の處置にあらざるとを信ず。要する所ろのものは、即はち偉大の人物是れ也。

モゼスがイスレール人を導びき、四十年沙漠に露宿して、終に之れをカナンの樂土に殖民せしめんとするや、常に敎ふらく、汝等もし神の旨に反かば、決して國を造る能わじと。淸敎徒の初めて米國に著するや、先づ祈りして云はく、吾等が子孫は神の民たらざる可らずと、即はち第一に敎會堂を建設したり、次に學校を建設したり。凡そ眞誠硬固の殖民を爲さんと欲すれば、必らずや、此の信仰と決心とを以て其基礎と爲さずんばある可らず。彼の黄金を以て肥料を買ひ、肥料を以て地力を買ひ、此の買借したる地力を用ひて漸やく一二回の收穫を爲すが如きに於ては、殖民移住の事遂に何の功をか爲さん。報德講の敎祖、二宮金二郎先生云く、開墾とは、荒地を變へて美田と爲すとなり、今日の美田を數百千年勞苦したるの結果なりと知らば、目前の荒地を一化して美田と爲さんには、即はち數百千年間の勞苦を一時に耐るの決心なかる可らずと。先生すでに此決心あり、此を以て能く磽确の地を變へ、十年にして櫻町の豐田と爲しぬ。夫れ、殖民者は先づ此の決心なかる可らず。初めより會社に莫大の株を集め

其金の力によりて辛くも航外移住し、半ば死せる動力を擧て、巨木森々、荊棘亂々たる荒蕪地を耕やさんとを欲す、而して之より速かに利益を擧げ、其利子を以て先の株金に配當せんと欲するに至りては、狂妄の夢、癡人も尙ほ結ばざる所ろのものなり。殖民せんとするの人物は勿論撰ぶ所あらざる可らず、然れども率先して之を導びく所ろの將士に至ては、尤も先づ其人を得ずんばある可らず。彼が未來の邦土を確認すると、コロムバスが如く、未來の邦土の未來の榮光を確認すると、モゼスが如く、其の移りたる邦土を清めて、長く万世の大經綸を確立すると清教徒が如くならずんば、殖民に渴かざるの生命を吹込み、之を新鮮にして万代良民の祖先と爲さんと極めて難し。

夫れ此の良將官ありて之を率ゆるとあく、彼の良民ありて潔白の思想に欝勃するにあらずんば、尋常豚の如き人物の移住殖民、億万人ありと云ふと雖ども、之れ吾人が謂ふ所ろの殖民にはあらざる也。斯る卑劣なる殖民は、恥を海外に曝さんと出でゆくなり。海外にあつて、酷遇慘待せられ、白人の奴隷とありて黑人の類に列し、子孫に言ひ傳へて、吾等が先祖は東洋の神洲日本なれども、此處に奴隷と爲れるによりて、遂に黑奴の中に加入せりと遺言するに至らん。あゝ如此くんば、海外に日本の新領地を開かんとするの殖民は、偶たま以て、同胞を外國に賣るに異ならず、榮光を國外に發たんとするの希望は恥を列邦に曝すに均し、餘力を彼の岸に漏さんとするの政策は、遂に本土の譽れをも沒するに了る、遺恨何んぞ耐へん、左れば、精神確固、理想高潔、雄思勃々、愛情如泉の偉人物にあらずんば、決して殖民政畧の率先者たると勿れ。能く未來の美國を確認し、天に朝するの理想を新政に托し、身を獻げて民を愛し、万難万艱を排して情を泰山の安きに置き、快濶の精神泉の如く、愛思混々として溢れ出るが如き人物にあらずんば、國の爲に斷じて殖民論を唱ふるとあかれ、而して、之に應じ、旗下に子來するの同志者も亦た必らず個々の小英雄たらずんばある可らず。ゼチラル、ブース、其最黑英國中に記して云く。

殖民たらんものは、正直と、眞實と、勤勉との念に滿たざる可らず、何如なる男女も殖民局に來るとを得、然れども何如なる人物も、前の資格なくんば決して渡航するとを許

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

さず、若し之を欠くときは斷じて殖民成功の見込なき也。

彼等は必らずや、

自個と同群との爲に大ひに爲す有んとするの大望心を吹き込るべき也。

必らずや、困難に耐ゆるの修練を研くべき也。

必らずや、節用儉約の徳に慣るべき也。

夫れ如此き、率先者と如此き良民とを得て初めて殖民に着手すべし。即はち少くとも此の決心ありて而して后ち殖民論を唱ふべき也。あゝもし老西郷に似るの人物あらば、その人は即はち殖民論を叫び亦た之を實行するに適する也。

あゝ四方有爲の青年よ、日本の地裏店の如く、制度老母が手帳に似たり。大ひに爲す有んとするものは、頗ぶる自由の足らざるを感ぜんとす。其人よ何んぞ猶つて海外に新大和民族を結成するの大望を奮起せざる、而して何の英雄漢かよく此等の青年を結合し、歌を歌ひ、エキセルシヤを吟じ、纜を解いて、波濤を破るものぞ。

殖民政略に先づ偉人物を要するの理、同胞の未だ心せざるものに似たり、之を所謂る二大事件の一となし、謹で警告す。

雜録

佐倉宗吾の細君

天知子

寥たる野影、颯たる松風、這里下總の江原臺。嘗て暗黑時代の最中に於て、傲驕なる貴族界の膽を寒からしめたる平和的の一平民が直接には五万三千餘の黎民の爲め、間接には日本全土に向て封建制度の惡弊を喝破したる一良民温かきホームの生血を捧げて、犠牲獻身の磔柱の上に苦叫を以て印刻したる一義民が――我れ既に勝てり――と鳴響きたる鮮血を迸ばしらせし所なるぞや。予偶々杖を此印旛郡公津村ゟ曳くも野草淋しく枯れて行人稀れに。刑場の跡石標冷やかに立ちて狐悲しげに鳴く。轉た當時を追想して潸たり又慨たり。此頃春雨しめやかなるの夜、端なく宗吾の衷情に感泣し、同時、賛嘆の美を呈せしは其細君なり。世人能く佐倉宗吾の名を知る、而して此人を致したる黒幕内のミセス宗吾を知らざるこそ憾めし。予は今猶つて其美を紹介せずんは非らず。聽け、宗五郎の細君は阿三と云ふ、下總岩橋村の村學究なる木村要の娘なり。十五歲の時母を失ひ、父の生計を助けて飽

かず。容色艶美にして人多く心を動かす、偶々博徒の長砧權次ある者に挑る丶事屢々なり、お三能く節を守りて其利と其威とに打勝てり。權次其父に逼りて得ず、時賭博に負けたるに際す、則ち怨と慾とを以て一夜要を病床に慘殺せり。時にお三醫者を招かん爲め不在なりしが、此時歸り來りて一驚爲す所を知らず。忽ち奮然として涙を拂ひ、權次の油斷を窺ふて脇差刀を引抜き、勇聲一喝仇を打取り了す。＝此擧や既に非凡＝名主惣左衞門其孝烈に泣き、其膽力に感ず。其濟貧を愍れみ、家に養ふて子息惣太郎の妻とす、惣太郎は即ち宗五郎なり。娘の時代に既に孝烈の芳名高く、女徳頗る深り來る事斯くの如し。妻君と成りては義父母に精實に、夫に温かく、能く人を愛せり。堀田家の忠臣松浦隼人が病ひの爲め家に身を寄せたる時、其心もて看病せしが如き、實に隼人が民の爲に盡さんとせし決心は、與りて此夫婦の徳に刺擊せられしもの多しといふ可し。減税嘆訴の事起るや、お三能く夫を助けて共に晝夜苦を分ち、常に慰め勵まして怠らず。各名主來りて屢々其家に密議するや、細君實に注意周旋の勞ありしと云ふ。宗五郎が死を決して江戸に出づるや、細君血涙を振て愛を割き、義に據て男子の膽を烈々たらしむ。而して能く幼き五子を養育し、災を恐るゝ多くの僕婢が辭し去の心細さに屈せず、僅々たる餘財を整へ、絶えず寒悃を擁して泣き、常に夫の苦難を思て安臥するの日なし。＝此擧既に平凡の細君に非ず＝悲しいかな、宗吾捕へられたるの報に胸を打つや否、獄吏其家に亂入し來て五子と共に此良妻を獄に下し、加ふるに殘酷なる拷問を以てせり。阿三泰然として死を決し、却て夫と苦を共にするを歡び居たりといふ、以て愛情の濃かなりしを知るべし。東光院主法隨なる者、此婦德に感泣し、爲めに妻子等の許されん事を熱願す、聽れず、更に江戸に哀訴す、又省みられず。終に宗五郎と共に磔刑に定めらる。阿三磔柱の上に在りて、最愛ある四人の子が斷頭せらるゝを見て斷腸の涙潸然たる事久し。忽ち夫を顧りみ最後の言を發して曰へらく、人死に臨んで決心せる一念は必ず祟を爲すといふ、吾夫然思さずや。宗吾答へらく、吾れ能く念ぜん。此日天陰々と曇り、人皆流涕せざるなし、終に無殘の鎗先に悲鳴を殘して死し畢んぬ。阿三時に三十八歳、時は是れ正保二年二月十一日なりき。予序して此所に至り、愁然として筆動かず、感

慨高く激して戸外の雨滴人語の如し、卒然當時の光景明了と現出して痛く胸を打つ、而して又天女の如き其美は光り輝きて朦朧たる雲際に高く微笑まれ見ゆ、思はず燈を滅して嘆ずらく、ア、三百の義士此細君を要すと。

岡山孤兒院

盧川子誌

三個の假面。孤兒院を訪ふて集會室に入る者は、其前面に三個の假面＝青鬼、赤鬼、お多福面＝あることを見るべし。これを以て室内の裝飾品と思ふものも非ざるべく、其高く掛げられたるを見れば、小兒の玩弄物にも非ざるべし。余の全院に至りたるは午後六時頃なりき。數點の號鐘と共に、彼處の隅より此處の蔭より、遽しく集まり來りたる孤兒七十人許、列座せり。石井十次氏の祈禱を以て會を始め、數人の孤兒一日の行爲に就き報告をなせり。次に石井氏は右方に掲げたる青鬼を指し、衆兒に告げて云はるゝ樣、此青鬼の如く角を生やし牙を出だし僻み曲りたる心を以て惡事惡行をなしたるものあるか、あらば擧手せよと。凡そ十四五人擧手したり。然らば此赤鬼の如く顏を眞紅にし爭論喧嘩をなしたる者あらば擧手せよと。擧手したる者凡そ五十餘人。時に一兒あり、訴たへて曰く、何某は今日怒りて人の頭を打ちたるに手を擧げざりしと。＝彼等の無邪氣質朴なる愛すべし、＝次ぎに、此のお多福面の如く柔和に謙遜りて終日喜こび笑らふて善事をなしたる者あるか。之れに應じたるもの僅々四人のみ。石井氏衆兒に告げて曰く、此孤兒院に青鬼赤鬼の如き者あるは憂ふべきなり、以後は一層愼みて、謙遜柔和善良なる小兒となり、孤兒院をしてキリストの愛し給ふ子供の住家となさゞるべからず云々。我等孤兒院の子供にあらざるも三個の假面につき、省みる所なくんばあらず。大方の紅裙子に向つて、お多福面の如くあれと云はゞ、こは三國一醜屋の看板なりとて嫌惡せらるゝならん。併し其精神の存する所に至りては、學ぶべきものなり。

子供の演說會。余の爲めにとて此會を開かる。演說會は、毎週土曜日にて、一週中尤も愉快の時なるよし、順序に從ひ登壇する者六人、其卓越なるものを記せん。

丸田大一、（もと赤椀大一とて、六歲の頃より父母兄弟を失ない、大なる赤椀一个を携へて、乞食しつゝありしを、或一人拾ひ來り、己れの姓の一字づゝを分ちて、丸田とはなしぬ、）

演題。牝雞。雛を養ふ話。莞爾として說き出して曰く、皆樣の御存知の如く、牝雞は雛を大切に可愛がります、犬や猫が來て雛を取らんとするときは、直ちに之れを防ぎます、その樣に私共の父母も、子供を愛して下さりますから、親の恩は山よりも高くあります、（拍手喝采）。

矢野岸代（孤兒院の花、他兒の模範とも云ふべき愛らしき少女）

祈禱の力。優しき口もとにて、說き出して曰く、天國の門を開く鍵は、祈禱であります。スコットランドメーリー女王、百万の兵隊よりも、ジョン、ノックス一人の祈禱は、其力が強くありました。それ故に、孤兒院の小供は、祈禱を務めて、神さまより力を得ねばなりません、

二三年前まで街頭に彷徨ひ、野外に露宿し、衣薄く食乏しく、無敎育に育ち來りたる小供の口より、此の如き話を聞くを得んとは、實に望外の喜なり。演說終り、勇壯活潑なる軍歌を唱へ、會を閉づ。

一人の痴兒、持田清となん呼べる兒童あり。身躰厭くまで崛强なるにも係はらず、稟賦痴鈍なり。石井氏命じて、他兒と共に米を搗かしむ。暫時にして歸り來りて曰く、「父上と一所にあらざれば、搗かず」と、石井氏は、多忙多事の中にありながら、其請に應じて、米搗をもなさるゝなり。斯の如きこと數度、其後は石井氏の代りに、他兒と共に米搗き吳れよと依賴せらるゝ時は、勉めて働くに至りたりと云ふ。

乙女の心情

中島俊子

橫濱の留主宅より、昨夕盜賊這入、多くの品物ぬすみ去りたれば、至急御越ありたしと中郵書の達したるは、去月廿一日の午後四時ごろなりき。余が留主を托するとき、盜賊這入しときは、拒むとていたし方もなければ、望がまに〳〵遣はすべしといひ置きたるを以てにや、京濱の間、電信にて通じもせで、郵便にていひ越すとは、迂遠なり。されど、後にて慌はてたとて、何の功もなければ、其夜は打臥し、翌朝行く事に決したり、盜まれしものは、カバン類とあれば、家人中誰の品最も多きや、獨り余が念頭にかゝりしは、余が宅にありし嫁入前の乙女が衣服なり。盜賊情あれば、彼が衣服のみは遺しおけよなど、思ひて、其夕は夢に就き、翌日の早き滊車にて、橫はまの家にいたり、留主居を見るや否、かの乙女のカバンは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

無事なりしやと問へば、カバンは山に棄てありしも、中の衣服は何ものこるものあらずと。余は再び他事を問ふの心なし。効はなくとも、其カバンを一見すれば中に少さく紙につゝみしもの二個あり。こは何ならんと披けば、精腦一袋と、葉巻煙草の飲さしとなり。余これを見るより、乙女が容音、余が眼頭に徘徊せり。乙女が所持の衣帶は、乙女自ら作りしものにあらず、必ずや父母相寄り、かの女色白ければこの染色こそよくうつろなれ、かれ脊高からざれば、この縞こそ脊高く見ゆるなれ、この帶に、この衣物は、晴合よろしかるべし、昨春の新衣は、緋桃櫻に倣ひしが、今春は楊柳の新綠色こそよからめなど、一衣一帶は、父母が幾多の愛情を染め出せしや知るべきあり。而して、今や其父歸らざるの人となりたれば、乙女がカバンを披く毎に、色擇び縞好み玉ひしときの父が顔色は、猶紅翠陸離たる衣袖の上に映ずるあるべし。父が存命中に、嫁入の衣服も作りおかんものよとて、作りくれ玉ひし父の意底は、無言の中に乙女解したれば、朋儕と觀花拾翠の散歩にも、曾て着る事なく、濕氣を妨ぎ、塵を禦せがんとての、この精腦、この煙草、カバン盜まれしと乙女聞きなば、如何に悲しく思ふらん、未練は盜まれし衣服にあらずして、歸らざるの父にあるべしと。想ふては余が胸も裂けんずるほどなりき。されど報知せずにおくべきにも非れば、巨細を報じぬ。乙女は落付きたる筆跡にて、思ひがけなき電報、如何なる事が起りけると披き見れば、橫はまの宅盜人這入しとの事にて、私のカバンもとられし由、私しの品は、すべて粗末の物耳なれば、少しも念頭に御かけ下されまじく云々。といひ越したり。余これをよみて、乙女が心情いよ〱いぢらしくぞ、感じたれ。

余がかくの如き事を記するは、平素世の乙女の方が、あるがうへにも、衣服を父母にせがみ玉ふの、非なる事を、申す事度々なるが、世には悲しき事ながら、盜人も絕へず、火事もある事を覺悟すべければ、常衣晴着の二組三組の外は、決して作り玉はぬ方よろしと云ふの旨を、いよ〱深く信ずればなり

氷川伯を訪ふの記（下）

生野ふみ子

次に僕は今日の、有志家とか、壯士とかいはるゝものゝ内、動もすれば、節操を枉げて、其主義を二にするの嫌ひあるものあり、之れを維新前の、勤王とか、攘夷とかいひて、奔走したるものゝ中の、下流のものに比べては如何。維新前の壯士は、今日の壯士と名くるものと、幾分か異なりたる處ありし

や如何と、問ひたるに、伯はから〳〵と打笑ひ「そんな馬鹿な事をいつては困るよ、昔しだつて今だつて、どうせ半分は似せものがあるわネ、只昔しの奴はネ、其頭がしつかりして居ッたから子分の奴等が、あまりうろたへなかつたのサ、今は何かへ、此人あらばッて、人民が其人にたよッて、安心するといふ人があるかエ。ありやアすまい。だから猶まごつくんだ、夫れに維新前は、皆夫々に祿といふものがあつたし、又祿に離れたものでも、夫れを支配する頭は、可成り持つてる奴だからよかつたが、今は頭からして、困るものが多いから、ダメダヨ。つまり人物がないんだ、人物さへあれば、下流のやつはどうでもなるヨ。〇〇〇〇マアわしの知つて居る中では、西郷だつたが、あれは車夫までも西郷さん〳〵といつたらふ、あれは何か、學問でいはすのか、議論でいはしたのか、そうじやアないだらふ。次に儂は

今日我國の計たるものは

と問ひかけしに、伯は儂の詞の終るを俟たず「夫りやアいつもわしが皆にいふんだ、おまへたち、國家の爲め〳〵といふのなら、先づ國家の爲に、自分達の家産を潰さないやうにおい、しよ。といふんだ、夫れが第一じや、支那の奴を卑屈〳〵といふが、あれ等は皆自分の地券を自分で、持つて、國家の爲とも何ともいはないでも、國家の爲に、地所を他人の手に渡さないやうにして居るのじやあないか。日本人のやうに、口ばかし達者になつても仕方がない、政費節減だの何だのッていつても、算盤玉が、はぢけないやうな議員さんでは仕方がないヨ、一二年この方皆少しく氣が注て來やうだが、然しまだ、此模様では國家の大勢が迫つたといふ形狀でないから、まだ〳〵氣運一變といふ處へは急にゆくまいよ。わしももう七十になッてから、引籠ッて計りは居るもの丶、寢ては考へてるんだ、考へるんが一番だ。もう此邊で御免を蒙りたい。

と仰せられたれば、倚ほ伺ひ度事はありしかど、余儀なく暇を告て退出ぬ、左れど始の內よりは、次第に御氣色よくなり、終には又來あれば來よ、勝手な事をいふを構はずば、又話して聞すべしと、のたまひつれば、其內重ねて、拜謁を得る事もありぬべし、茲には只其少時の談話のみをしるしつ。伯の語氣は、一種靈玄の趣味あり、故にわざと、其詞の儘を記しぬ、其は伯にまのあたり接し玉はぬも、幾分か其風采を、想望したまふ、よすがにもとて、わざとなむかくは。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ビスマークの食物

近頃獨逸先の大宰相ビスマークを訪問せし人の語りし所なりとてビ公の食物を記するものを見る、即ち左に記さん。

朝の食物　猪の冷肉、つき碎きし馬鈴薯を沿へたる炙肉、煮たる鳥肉に野菜を沿へたるもの、膃肭、新しき牛酪○麥酒、葡萄酒、香ひある清酒等あり、

晝飯　ソップ、牡蠣、大口魚、炙りたる牛肉に鹽漬の野菜を沿へたるもの、雛肉、干葡萄の煮たるもの、菓物(種々)○三鞭酒、列印酒、布笥地酒、シユロッス酒等あり。

救濟軍の大敵　ゼ子ラル、ブース氏が救濟軍を率げ、大運動の旗をロンドン街頭に翻へせし事は既に世人の知る所なり、然るに此氏の運動に反對せんとて將に社會に頭角をあらはさんとする人あり、名をモンテーグ、ウ井リアムと云ふ、此人一書を著はして既に印刷に附せり、世に出る遠きに非る可し、社會の害惡を論し、其起因、救濟の方法を講ず、此書の末節に於て甚だ激語を以てブース氏の計策を駁撃せしを見る、されど今此處に精しく云ふべきにあらず、此書價値も高からず、論ずる所公正にして全く利己私心の爲に企圖せしものに非ず。

小說

浮雲胸

第七回　空榮華（下）

雲峯子

世に於て大いならんと思ものは却りて小さきものとなり、へりくだりて人の足をも洗ふ人はかへりて上帝の前に大いなるものと存候、此世の智識、名譽、財産等浮める雲の如きものと存ぜられ候、空しき事は凡て打すて、眞正の榮えを求め給はん事妾の切に望む所に御坐候、

是しづ子が書き送りし手紙の一節なり、なみ子の心は今や名譽の一念にて滿ち、偶ま良心の爲めに責められ、不安心なる事あれば忽ち名譽の心を呼び起して之を抑ふ、さるからにしづ子の手紙を見て大ひに氣を損じ「咄、是我目的を達せしめざる妨害なり」と獨語しつ、手紙を引裂かんとせしが親友よりの狀、流石に裂き兼ねて、末段を繰り返して讀み、

妾の眞心より申上候事たとへ御氣にさはり候ても恐れ候はず、忠言は耳に逆ふと申候事、疾くより承知仕候、されど妾が愛心足らず、眞心ならざる爲め御身の反省を乞ふに至

らざるかと思へば恨めしきものは我身に御坐候、思ふて此處に至れば涙禁ずる能はず候、妾の心情御察し被下度、此處にて筆を止め申す可く候。

とあるを見て心に感ぜし所やありけん、暫しは頭を打たれて居たり、されど其感情や、石地に落ちたる種の如く、根ざす事能はざりければ忽ち枯衰しぬ。

なみ子は企圖せし事もありけるが十二月末つ方は叔母なる人の家も忙がはしければ之を助け抔して著筆する時もなかりけり、斯くて年はくれぬ。

月かはり、年新たまりぬ、あみ子は數日の程は家にありけるが叔母の家も少しく手隙となりしとて五日の朝友人の許を尋ね、年始の祝賀抔のべ、尙久しく談話す、午後に至る頃談愈佳境に入るが如く、精神壯んに、音聲自ら高くなりぬ、今なみ子の語る所を聞けば「それ故女子は卑屈なり、行爲の氣象なし抔云はる、豈慨せざる可けんや」と長大息す。傍らに一女史あり、これ亦此家に來合せたる人にしてなみ子の舊友なる可し、池田うき子と云ふ、今なみ子の言に應じて「然り〳〵、然れば之を改良するの方法如何、徒らに慷慨するは不可なり、宜しく救濟の策を講ずべし」と熱心に云ふ。「さればなり、今日に要する所は辨舌と文筆の二器なり、出ては許多の人を集めて堂々正論し、入つては文章を草して擴張論を述ぶべし、是今日の急務なり」と云ふ。此家の令嬢はいと子と云ふ、姓は染野と門の柱上にあるにて知らる、いと子は少しく温厚に近き性なるが「妾つら〳〵思ふに女權擴張の事決して斯る方法によるべからず、女子各德を修めば人自ら尊敬せん、高言大語して女性の位置を高くせんと思ふは不可なり」と恐る〳〵云ふ、なみ子は少しく激昂し「御身は亦例の保守主義にて斯る事のみ云ふ、金谷氏(しづ子)の如きは學校にても有名なる德行家なりしが何人も尊敬するもののなきにあらずや、其父母すら日本の弊風たる壓制婚姻を彼人に爲さしむるにあらずや、今日は是默すべき時に非ず」と云ふ、傍らの二女史是說に服するものゝ如く默然たり。

尙三人にて暫く打語らひ、相分れしは午後四時頃なり、此處は神田の某町にて、夫れよりうき子は本郷に立かへり、なみ子は四ツ谷にかへりぬ。

昨年くれに書店に托しける一小說何時出版になる可きかとな

み子は心にかけ、待ちくらせば一日も千秋の如し「約束は中旬なりと覺ゆ、今日は六日なり尙九日あり、いと長き事かな」と獨語する事も屢々なり。

十日の朝しづ子より手紙來る、なみ子は開き見るに先づ新年の祝詞あり、次ぎに宗敎上の事をすゝむる語あり、なみ子は讀みて「亦例の事を云ふ、いとうるさし、最早聞くも面白からず」と云ひつゝ讀めば、末文に云へる事あり、

結婚の大儀は忽かせにすべからざるものと存候、さる故に未だ親しき交はりもなく、相知らざる人に嫁ぐは不本意と存候得共よく〳〵思へば既に免るべからざる樣相成候事故之を上帝の命令と信じ、聊か不滿足は申さず候、如何なる人と云へども眞誠の愛と德とを以て對せば必らず幸ひとなる可く候、父母は本月廿五日に式を擧ぐる樣取極め玉ひしよし申され候、何れ其時は招待狀を差上べく候、山河百里を隔て候故御光來を仰ぐも難かる可くと存候得共、當地御見物かた〴〵入らせられ候はずや、

云々と、なみ子は讀み終つて「斯る事あればこそ妾は默する能はずと云ふなれ、社會改良せざる可からず、然らずんば夫れ女性を如何せん」と獨語しつゝ筆を取り、何をか書きはじむ、こは昨年書き始めし論文の續稿なる可し。

待ちくらす間に數日を過ごし、十二日ともなりぬ、なみ子は小說の出版の後れん事をのみ心配し、今日は書店に書簡を出して問ひ合す、其返事に「十七日には發賣致す樣云々」とありければ、なみ子は其約束に違ひしを怒りしかど、詮方なければ默して止みぬ、勉強する心もなく、なみ子は斯る事にのみ心配して日を過しぬ。

朝早く郵便脚夫の聲聞ゆ、間もなく女中はなみ子の許に郵便物を持ち來る、見れば書物なり、例の小說なる可し。なみ子はとる手遲しと封紙を切り、開き見て其の體裁杯意外によく出來しとて獨り打よろこぶ。直ちに亦叔母の許に持ち行き、いとうれしげに示す、叔母は亦少しく賞言を呈するも所謂世辭なる可し。

先きになみ子の著はせしもの好評なりし故書店にては亦た斯る事もやわらんと發賣日より二三の新聞紙に廣告を爲しぬ、

袖の露と題し、傍らに、

嘗て「日本の花」を著し世の好評を博したる春山女史の新著

なり、明治の文壇に於て名を著はせしもの女子中恐くは春山女史其先鞭者なる可し、其趣向奇絶なり、文章の優雅なるは世人の既に熟知する所今更喋々を要せず、醉文山人本篇に序して「とは日本の花に勝る事數等なり」と云ひしは眞に當れるの語なり、讀者乞ふ本篇を購ふて妙味のある所を知れ、賣切れなば高需に應じ難し。

その文あり、未だ小説の珍らしき世とて、人々此廣告文を見て爭ふて購ひ見る、發賣せし翌日よりなみ子は亦例の如く批評の新聞雜誌に上らんかと待ちのぞむ。

十八日の朝なみ子は早朝に起き五六枚の新聞を購ひ見るに、例の太平新聞には亦長々しき批評あり、先きに好評を爲せし因みにて今回も亦大いに賞讃す。曉新聞と云へる、小新聞にて日々小説を掲ぐるを以て賣れると云へば俗人野卑の小説讀者は喜んで讀むよし、されば此新聞の批評如何は大ひに賣高に影響す、故になみ子は曉新聞を見るに亦非常の好評なり。他の二新聞に掲げたる所は數行の短評、可も不可もなく、只讀者に書名を報ずるに過ぎず。

なみ子の喜こび云はんかたなく世人亦春山女史と云ば、女流小説家の泰斗、文壇の女王と尊稱するものも盲評讀者間には少なからざるに至れり、されば書簡を寄せて女史に讃辭を述ぶるあり、車を走らして面會に來るあり、一方ならぬ評判立ちぬ、なみ子は愈得意然たり。

世間は廣し、人間は多し、奇妙なる人も少なからず、十九日の朝肥え太りたる一女、なみ子を訪なひ、先づ新年祝賀の辭を長々しく述べ、次で「御高名は疾より承はりぬ、始て拜顔を得て喜こびに堪へず、爾來御敎示を垂れ玉はん事を望む云々」とシハガレたる聲にて云ひ、亦次で「過日出版の小説は面白く拜見せり、妾も及ばずながら日本文學の爲めに一身を委ねんと欲す、是より師弟の關係を以て交はらん事を乞ふ、此處に一部戯れに起草せしものあり、添削を乞ふ」と云ひつつ原稿を取出だす、なみ子は「添删抔とは妾の能ふ所ならず、只拜見せん」と云ひて之を手に取りぬ、倘暫らく談話せる後客は原稿を殘して立出でぬ、なみ子其あとにて獨り思ひめぐらし、斯く迄人の稱讃するに至れるかと且は怪しみ、且は喜び、忽ち「先生」になりし心地して身の榮華を打よろこびぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

理學

小糸

問　赤道は熱く兩極の寒きは何故か

地球若し平面ならんには、熱の分配は何の處にても同一なるべきも、地球は圓體なれば、赤道地方は太陽より來る處の光線と地面と、直角をなすを以て、其熱度強く、兩極に到に從て漸々斜角をなすを以て、熱度大に減じ、積雪結氷常に絶へず。

問　斜角をなすの光線は何故に熱度弱きか

今此の理を解し易きやう、一圖を畫かん、其法は、或る距離まで二條の並行線を引き、之を一定量の光線と見做し、其二線間に、更に光線、即ち並行線と直角をなす線と、斜角をなす線とを、引く時は、一の小三角形を生ずべし、而して其光線に直角をなす線は、他の斜角をなす線より短きなり、然らば光線直射する、時は、小なる面を照すを以て光線濃き理にて、熱度強し、斜角をなす時は、同量の光線を以て大なる面を照す理にて、光線淡く、從て熱度弱きなり。

問　晝夜に寒暖あるは如何なる譯ぞ

地球は日々回轉する故に、此變化を生ずるものにして、日中は光線地面を直射する故に、前に述たる理に由り、強く熱せらるゝのみならず、一旦受けたる熱を反射する故に、一層暖かなれども、夜は之に反して、光線を受けざるのみならず、晝間受けたる熱をも、空間に向て放散し去を以て寒なり。

問　一日中尤も暑きは何時なるか

光線の直射は正午なるを以て、此時尤も熱度高き理なれども、寒暖計の示す處に由れば、午后二時と三時の間最高點となる。是理に反するが如けれど、決して然らず、蓋し大氣土地等の充分熱せらるゝには、多少の時間を要すればなり。

問　一日中尤も寒きは何時なるか

太陽の沒したる后は、大氣及び土地は熱を受けざるのみならず、却て晝間保合したる熱を空間に向て放散し去を以て、再び光線を受くる迄は漸々退却するなり、故に太陽將に地平線に昇らんとする時に於て、溫度の最低點を見るべし。

問　一年中にて尤も暑きは何時なるか

夏なり、其原因は亦光線が地面を直射するが故に外ならず、抑も地球の運行面と、地軸とは、二十三度半の角をなすを以て、直射さるゝか又は直射に尤も近き位置に至たる時は、即ち夏

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にて、北半球に在る我が東京にて、或る學者が四五年間觀測したる平均に由れば、

一月	貳度四	二月	三度一	三月	六度八
四月	十二度九	五月	十七度四	六月	廿度四
七月	廿五度二	八月	廿六度四	九月	廿二度
十月	十四度八	十一月	九度	十二月	三度一

にして、八月に於て溫度の最高點を見る、而して通常六七八月を夏とし算するなり。

問　一年中にて尤も寒きは何時なるか、

冬なり、此れ亦た前問に陳べたる理に由りて生ずるものにて、太陽が最も斜に地面を照す時なり、我が東京にては、一月に於て溫度の最低點を見ると前表に明にして、通常十二一二月を冬とし算するなり。

問　氣象の變化は何に由りて生ずるか

前陳したる地球上熱の分配及び地球の回轉速力等、其主なる原因にして、例へば熱したる空氣昇騰するや、地球の回轉速力に由りて、其方向を變ずるが如き、或は貿易風の生ずるが如き、颶風の生ずるが如き、又た雨降り雪降り霧生し霜生ずる等種々なる現象は、皆之れより生ず、故に氣象學を講じ、氣象の變化を知らんと欲せば、熱の分配を精査せざるべからず、而して同緯度の地に於ても、土地の高低、海陸の配置、潮流の關係等に依り、溫度に差異を生ずるとを深く細慮せざるべからず、即ち海は冬暖かに夏冷たきなり、陸は冬寒く夏暑きなり、故に島地にては夏冬の氣候に大差なきも、大陸殊に內地に於ては、冬夏の氣候に劇變あるを見るなり。

兒籃

幼なき英雄

ゆき子

此頃ろ英國の或所に幼なき小兒がありました、あなた方と同じ樣に毎日紙鳶をあげたり、玩具をもつたりして遊んで居ました、或日の事でしたが其母さんは何か用事ができて是非他家に使ひに行かねばなりませんでした、それ故此小兒に向つて「母さんは今一寸よそに行き、直ぐ歸つて來るから大人なしくして居るんだよ、そして赤兒も置て行くからよく遊ばせなければいけないよ、怪なくない樣によく氣をおつけ」と命つけて出て行きました。是は夕かたの事でしたから小兒の居た室にもランプをつけて置て母さんは行きました、赤兒は始の內は母さんのあとを慕ひもしましたろうが兄さんがいて玩弄物杯見せて遊ばせたものですから、直ぐ機嫌がよくなりまして室の內をあちらに行きこちらに行きして居ました、此少さいのは女の子で三歲でした、兄さんは今年八歲でした。兄さんが何か玩弄物を以て餘念もなく遊んで居た間に妹は椅子の上に這ひ昇りました、其傍の臺の上にランプがありまし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たから赤兒は手をのばしてそれを取らうと致しました、忽ちランプハ覆つて油が赤兒の身躰にもかゝり、其下にもこぼれて大きな音がしてランプハこわれました、此音に驚きて兄ハ赤の方を見ますと、赤兒の衣服に火がつひて居ました、それから直ぐ赤兒を椅子から抱き下ろして衣服を脱がせ、そして寢臺の上に上げました、其時此小兒の衣服にも火がつきましたから小兒ハ之を消さうとしましたが、消すことができないで此小兒ハ大變の怪我をしました、母さんは歸つて見て驚き、直ぐ此小兒を病院にやりましたが、可愛そうに、二三日して此兒は死しました。

あなた方が何時も祖父さんや、祖母さんに聞く御話しの内に強い職人の事があるでしよふ、あのよふな人々をさして昔から英雄と云ひましたが、あれは大人のする事ですから珍しくもありません、眞誠の英雄といふのは自分の爲めを思はず、人の爲めに盡す人です今の話の樣に自分の身躰を忘れて少さき妹を助けるといふ樣なものです、あの小兒は少しも私の事を思はず、母さんに賴まれた事として妹を是非救はなければあらないと考へたのでしよふ、あなた方も其お友だちや兄弟杯と共に居る時何か危ない事があつたら、あの子の樣に勇氣を以て人を救はなければなりません。

笑草

勸學院の雀

ふみ子

お役人樣といへば、月に三圓の給料を辱ふし玉ひて、路次の奧深く住はせ玉ひ、奧方、姫君を、辛ふじて糊口せ玉ふ方樣にても、何とやらむ尊ふとげに聞へ、商人百姓といへば、數個處の邸宅を持ち、幾十町の田地を耕す人にても、卑しげに思ひなさるゝは、封建時代の餘弊にて、是非もなき事なりしかど、十年ほど以前よりは、流石に文明の風、全國を吹き靡けし事とて、全く左るとはなくなりぬ。左れど勸學院の雀は、兎角喋求を囀り度ものにや、此程ある役所めきたる所敢て役所とはいはずの下司に向ひ、御身は給料何程を取らるゝやと問ひたる人ありしに。

「月俸八百錢づゝ支給せられ居るなりと。いと得意に答へけるとなむ、其は此

一七

處に集ひし人々は、年俸八百圓づゝ取れるを以て、其類に習ひしものありとぞ。

或る盲人、所用ありて相知れる人がり行きけるが、生憎に彼方にて日を暮したれば、今宵は此處に泊りて、明日歸り玉はずやと先方の人の留むるを、盲人の事なれば晝も夜も同じ事なり提燈だに貸し玉はゞ、今宵歸る方都合宜しといふにぞ、人々怪しみて、晝も夜も同じといふほどの人、など提燈を求め玉ふ、提燈以て何にかなしたまふにやと問ひしに、盲人答へて、否とよ、我提灯もて行んといふは、我が爲に道を照らすとにはあらず、人の我提灯を見て我に突當らざらむが爲なりといふにぞ、人々實にもと感じていと、大きなる提灯を貸し與へしに、盲人是さへあれば、幾許の夜道も、ものゝ數かはなど、獨言つゝ、歩みけるほどに、いつしか我家近き邊りまで、歸り來たりぬ、此處迄來ればもう大丈夫なり、扨て提灯の功用は著じるかりしよなど思ひつゝけて、尚も道を行程に、端なくも何人か突當りぬ、盲人は痛く愕き、躓きて下駄の緒を切りたれば、腹立紛れに大なる聲揚げて、さて／＼心づきなき人よ、眼明きの癖に、人に突當るといふ事があるものか、我此提灯が見へぬかと、威だけだかに罵りけるに、彼人はカラ／＼と打笑ひ、ハヽヽ、貴樣の提灯の火は、消へて居るじやないか」といひしとぞ。

是はいと古めかしき話しなれど、時過にける身を思はで、人の己れを用ひざるを恨みなどする人の、姿鏡にもとて掲げぬ、馬援ほどの强者にても、鞍に憑りて顧眄し、自ら用うべきを示すは、見苦しく、駿馬の骨を買ざるかと、若殿原をいひ懲しつる淸女の擧動は今の世迄も淺間しと評せらるゝものを、况して馬援ほどの伎倆なく、淸女の才なき人々をや、心せまほしき事にこそ。

さま／＼の温度

冬は温かきを思ふ、温たかさに様々あり、華氏の寒暖計にて申せば、

部屋に於ても好きほどの温度は	六五度…六八度
血温は	九八
コレラを病み尤も冷えし時	六七
血温の尤も高き時	一一〇
湯ヶ温さの程好きは	一一〇…一三〇
浴に飲む茶湯の温度	一三〇…一四〇
砂糖の溶ける温かさ	三二〇
なみ／＼の火の熱さ	一〇〇〇
酒の氷るに	二〇
血の氷るは	二五
乳の氷るは	三〇
水の氷るは	三二
蕃がへり、種の芽出すは	七七

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

早春

日高みつ子

、、山里（の端の）は雪とけそめて（の上より）いづる日の影もかすみて春は來にけり

評ふたつの「て」の音耳にたてり

安藤たれ子

、、霞立つ（長閑なる）春のあしたの長閑けき（柴の戸）にねさめとひくる鶯もがな

評待鶯の題也

立春

山口つる子

、朝日かげ長閑にはてゝ（にほふ）山の端に霞立つゝ（そなひく）春は來にけり（やぬらん）

鎌倉を遠くながめて

みさを

、、伊豆の海の波路はるゝ見ゆる哉昔しあそびし鎌倉の山

海邊初春眺望

みさを

○濱松の木の間の白帆日はてりて（朝日さし）霞そめけり沖つ島山

評長閑なる春景目撃するの感あり

煙

市村高彦

、立のほる（かすかなる遠山陰）外山のすその夕けふり浮世をいとふ（のがれし）人やある（たつ）らん

評上下別に下なれりそは夕けぶりさいひすてし下句にはうくろ言葉なければ也

家政

○此心何人に語らん

權謀術數に厭くことなき政治家ビスマークは、何人にも腹心を明かさず亦た何人より萬事一任すとの信用を得ることなし、左れど人間は此有樣にて滿足すること能はず、彼は彼が賢明なる夫人に對しては殆んど赤子の如し、何事も打あけざることなく、亦何事も疑ふことあらず、彼もし此の一人を欠かば、夙とに早く鬱死せしならん。人は元來心を開らかんことを欲し、隱すことを好まず、信任する人なくして己が思ひの丈けを語り得ざるほど苦しきはなし。賢妻は即はち良人が鬱積せる思ひを聽取り、他の万人が得て呈し難きの慰さめを供ふるものなり。

○夫婦の信愛

あゝ今の夫婦と云ふもの、其間柄の冷淡なると何んぞ斯く太甚はだしき。彼等が愛と云ふものは、肉情の愛なり、尤とも高尚なる一點に於て未だ互ひに信ぜざるを以て、愛ありと云ふと雖ども尙ほ互ひに疑ふ所ろあり、疑を含むの肉愛は邪推となり猜忌となり嫉妬となる、彼の身を殺す迄で互ひに相信

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

じ、万事を擲うつて他の幸福を祈るなどの潔ぎよき交はりは、かゝる間柄より生ずるとなし。一例を示さば、良人、己が妻に男子の親友あるとを喜こび、自個他出して妻の語らふ人を得ざるを心配し、彼の男子の友に頼みて、願はくは君、わが妻を見舞ひ玉へと嘱き送るが如き。若しくは、妻久しく病んで他にあり、良人が親しむべき友なくしてさびしからんとを深く痛み、其の尤とも仲好き女友に言ひ遺りて、願ふらくは君、妾はに代りて良人を励まし玉へと委頼するが如きとあらば、吾人は初めて見て其夫妻の互ひに信ずると深きとを承知す。今の夫婦互ひに相信ぜずば、何如にして高尚の愛あるとを得ん。高尚の愛なくして、夫たり妻たりと稱し、空々日夜を送るの様、如何にあはれなるや。吾人は彼等がよくも共にて満足し居るとよと、慨歎せずんばあらず。

〇家政の根本

家の締りを整へ、朝夕の規則を嚴そかにして一家能く修まりて、戸内自づから靜粛あるは、家政に欠く可からざるものなり、料理を甘くし、經濟を節し、下男下女を能く慣らし、出入のものを歡こばすなど、亦頗ぶる大切の覺悟なり。

總じて、家政を能く治むるは天下を治むると同じとにて、八方四方に綿密の注意を要し、少さかも闕漏なる所ろある可らず。左れど、悉とく之に得たりとするも、若し一つのものを欠ときは、万事死して生命なし、亦もし此一つのものを存すれば、他に多少の欠點不都合あるも、償はれて尚餘あるべし。その一物とは何ぞ、即ち愛なり。細君の愛溢る時は、家の内規則なき中に自から規則あり、料理粗末のうちに言可らざる味ひあり、下男下女出入近邊のもの、構はずとも母を慕ふ如くなつくべし。愛はすべてのものに味を加ふ。左れど、若し愛を欠てたゞ綿密嚴粛なるときは、ホームは重箱の如く、たゞ四角きちやう面にして、何の樂しきともあるまじ。周公孔子云はく、天下を治るの本は仁なりと。家政を修るの礎も亦た愛なり。

〇夕ぐれの團欒

主人一日いそがわしく、辛く用事を了りて家に歸る、妻子は言ふ迄もなく、下女も書生も狂るへる如く走りて出で迎ふ、家に春の復れる如し、斯て互ひに團坐し、一日の事を話し、何人も上下主從を忘る、而して其間厳然たる威愛あり。かゝるホームは、天の使の樂しみて往來する處なり。

批評

○美術世界　撫象子

渡邊省亭氏が編輯にて、府下春陽堂より出版する「美術世界」すでに第三號まで出でぬ。いよ〳〵出でゝいよ〳〵麗なり。趣き雅美にして、味わい深く、國華の粹を開きて能く人を驚かすと云ふべし。願はくは、上に洋字の解を加へ、廣く海外に販賣して、日本の美術を示されんことを。

○山吹塚　雲の舍主人

新著百種の第十三號にして森亭九華氏の著に係るもの、名づけて山吹塚といふ、一旅客須磨の浦に至り、古塚に詣り、其邊りなる賤の老婆に遇ふて其由來を詰ぬ、老婆は一の畫人を主人公となして悲哀の一話を爲す、此一話即ち一篇を爲すなり、上半篇は趣向古めかしけれど讀み惡き所なく、下半篇の始め、畫人と其師家の一女と相語り、相親むの樣、未だ日本凡俗の戀愛のみ、甚しく聞き惡き文字と云ふにわらねど何所き方ある可し、第十一回の終り方の如き、夫婦の間に於て實際語り得べき所ならんや、余は愛情を寫すを不可ありと云ず、清潔に寫さん事を望む、殊に夫婦の間に於ては斯くあらん事を希ふ、末段蝶を賣る子に繪を托して人に見せしむるの所、花子の姉をして見せしむる爲めに作りしが如く見えて、妙と云ふ可からず、篇中の人物をして言語のまゝを談話に用ひしめながら、京都人に今日の東京言葉らしきものを用ひしめしも如何にや、言語の外の所は所謂元祿文に似たり、非常の妙所もあけれど亦さしたる欠點もあらず、無難の出來と云ふ可し、文字の上より云はゞ。

○標註榮花物語　上　同

榮花物語は文脉より云へば和文あれど古代の源氏物語、伊勢物語抔云ふもの程今の人に解し難き文字にあらず、記せる事柄は全く事實に基きしものあれば人をして唯に其の文を學ぶの益あらしむるに止らず、歴史上の事實をも學ばしむるを得ん、此頃ろ、小中村義象、關根正直の兩氏新たに標註を加へて出版せられたり、これ教科書にして有用有益の書物なり、原文は甚だ長ければとて之を刪除して教科書に適當ならしむと云ふ、是亦可なり、何續々後篇の出でん事を待つ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

婚姻箴（方寸子に次て）　雲峯生

放任する勿れ　信者と不信者と耦ふことなかれ、蓋は義と不義と何の侶なることかあらん、光と暗と何の交はることかあらん、キリストとベリアルと何の合ふことかあらん云々と、在昔使徒ポーロが哥林多人に警戒して男女相擇ぶべきを示したる言語は斯の如し、吾人もとよりポーロ時代の哥林多人民と現今日本の社會と風俗習慣相同じからざるを知る、彼に於ては是より一層男女間の風俗亂腐せしならん、然れども我國とて未だ人に放任して差支なき程進歩せず、一方に於ては、年死白髮の老人其子女をして名聲、門閥、財産等の何れをか有する人に嫁がしめんとし、他方に於ては放恣生意氣の徒前後を知らず、一時の痴情に狂せんとす、其後者は無論不可なり、されど前者も可なりとなさず、吾人は思ふ若しポーロ今日日本に出でなば必らず、其警戒する所哥人に戒めしものに甚だ遠からざる可しと、婚姻若し大事なりとせば之を人に放任する勿れ、虚心平氣に考へよ、即ち「私心」を除きて思ひめぐらせよ、されど思ひわづらふ事勿れ。

運命論者たる勿れ　只夫れ萬事は上帝の攝理にあり、聖經は神意の存する所と信ぜよ、されど全く世事肉躰に關はる事は意に介す可からずと死信を起す勿れ、吾人は「汝等明日の事を思ひわづらふ勿れ」と聖經に教ふるを知る、されど「亦額に汗してパンを得よ」とあるを記す、憂慮するは信仰なきが故なり、信仰あらば安心と平和をもて日々爲すべきの苦勞を爲さん、即ち「爲す可きの苦勞」とは全く將來を思ふ勿れとの云ひにあらず、農者秋收めんとて春蒔くは何故ぞ、人來世の救助を冀ふて道を信るは何の爲ぞ、將來を思ふ事若憂慮に非るなり、適度を過さゞるよりは須く思ひめぐらすべし、是「今日爲すべき勞苦」の一部分たればなり、「何を食何を飲み何を着とて思ひわづらふ勿れ」とあるを見て上帝は必らず人をして餓しめず、凍えしめずと思ひ、學問を止め、仕事を止め、手を拱き、口を拊んで幸の天外より落下せん事を望まば誰か妄信迷想を笑はざらんや、斯の如きは生死苦樂は更なり、萬事を上帝の攝理に任ずと、口にこそ思へ、心にこそ思へ、其實「意志不自由論者、運命主義」の徒と異るなし、我身を顧み、他人

を思ひ、信仰に背かざる限りは思ひめぐらせ、人各意志の自由を與へられぬ、こは何故ぞ、思慮する事不可なりと云ば、寧ろ、意志の不自由なるに如かず、語を寄す幾多の青年男女よ、婚事は大切なり、父母にも朋友にも私心にも委任する勿れ、運命論者となるなかれ。

人物を愛すべし　パーソンとは靈魂にもあらず、肉體にもあらず、靈肉相合したるものなり、人之を愛すべし、靈のみを愛せよと云ふは高尙ラシクして未だ至らず、「それ甦る時は娶らず、嫁がず、天にある神の使等の如し」と云ふは靈體に男女の別なきを示すものなり、既に男女の性なし、如何で男女の相愛あらんや、男女の別あるは靈肉相合する現世に於ける事のみ、されば永遠の「われ」、永遠の「かれ」を愛すと云んより、パーソンを相愛すべし、吾人が肉體と云を見て賤見とする勿れ「汝等の身體は神の宮殿なり」とあるにあらずや、何ぞ不潔賤汚のものならんや、男女の性を以て相愛するは此世を限りとす、肉落ち、骨枯れ、天地一變して靈界に至らば人皆天使の如く萬人平等に相愛すべきなり、道を信じて而して後人を愛するは可なり、靈のみ愛するは男女の愛にあらず、如何で婚姻の餞となさんや、惡魔も天使の姿もて來る、實際ならざる議論も高尙なりと聞ゆ、乞ふ再考せよ方寸子、乞ふ誤る勿れ青年男女。

愛の高下　パーソンを愛するに至るは直接ならず、此に入るの門戶あり、其高きものは資性、學識、趣味等より入り、卑しきものは容姿、財寶、裝飾、門地等より入る、是等の附屬物を愛するのみに止らば、即ち門戶に入りて止らば勿論眞正の愛ならず、附屬物と共に消長するの愛なり、されど之を經過して靈肉相合する彼人物を愛するに至らば眞の愛に達せりと云ふ可し、此に至らば附屬物其愛を變ずる能はず、況んや時間をや、亦況んや空間をや、人夫れ附屬物より入るを賤しとする勿れ、只眞にパーソンを愛するに至れるや否やを思へ、至らずとせば空愛に狂ふ勿れ、理性をして煩惱に勝たしめよ。

時を定むる勿れ、幾歲までとか、何時までとか私心を以て時を定むる勿れ、人によりて時來らば勉學の時にも人に聞け、時至らずば長ずることを憂慮する勿れ。

寄書

淚を揮ふて同胞兄弟に告く

醫學士　美芳野舍主人

人として自惚の心なきものはあらじ、先づ己に慢じ、家に慢じ、而國に慢ずる心は、世界一般人間の情なり。故に我が日本人民は、自ら稱して君子國と云ひ、畏れ多くも皇統連綿の一事は、實に世界中此國體のみと慢る可し。然るに歐洲の人士は、此の日本國を認めて、眞に一の君子國となすか、東洋第一の文明國となすか、余は大に之を疑はんと欲す。

嘗て余が友人にして（目今海軍少技監の職に在り）、先年鋼鐵事業研究の爲、政府より派遣せられて、長く獨逸國エッセン市フリードリヒ、クルップ會社に在りたる人より聞く。元よりエッセンの市は、決して首府ベルリン府の如きものにあらざれば、其の人民も亦決して田舍漢たるを免れざれども、仝氏（當時其市に滯留せる日本人は氏の他に一二人ありしのみ）が散策を試みんとして、市中を徘徊したるとき、童子等は氏を見てヒ子ーゼ（支那人）ヒ子ーゼと侮り、馬の鞋なげつけん、ばかりなりし。氏は毎々人々に對してヤパン（日本）人なる由を語り聞せたれども、仝地の人等は、ヤパンとはそも何地にあるの嶼なるや、と反問せるのみなりし等。之れを他の歐洲に留學したる人に案るも、ロンドン、パリー、ベルリンの府中、中等以上の人にして、なほ日本國を知らざるものなきにしもあらずと。普通の人民にして日本國を知らざる、なほ其無智を恕すなし、今や獨逸國グラッツ大學、精神病幷に神經病學の教授として、世界精神病學上に英名を轟かすところのドクトル、エル、フォン、クラフト、エビング氏にして、左の言を發す、吾人同胞はそも之を如何せんとするや。

クラフト、エビング氏の著書甚だ多し、就中一千八百八十九年第四版を出版したる、色情狂論（精神病學の一部）の如きは、實に研究の行屆きたるものと云はざる可らず、余頃此書を繙き、其總論の中、左の一節に至り、思はず卷を擲ちて、憤然なすところを知らざりしこと少時。

此の色情的生活の、正の道に趣かんとするところ段楷たるや、實に高くして而して又た之を他の開化的進化の情態に比すれば、其甚だ遲緩なるを知る。例之はエステーチン（美術）上より見るに日本人は其妻を迎ふるや、先づ其女子は、幾年の間、歐洲に所謂妓院の位置に立つところの、茶屋に在り、仝所に於ては、其◎部を露出し、裸體にて歩行するも、少しも之を愧づる色なきに至りたるものを、娶るを其風俗（モラル）とす。兎にも角にも日本人に於ては、何れの未婚の女子も、必ず公娼をなす。而此一事は、後に一家の妻となることに關して少しの障りともならざるなり。其證たるや、此の不可思議なる人民に於ては、其の妻を迎ふると云ふの義は、單に娛樂、生殖及び勞働の價値を有するのみにして、毫も道德上の價値を有せざればなり。

嗚呼實に何の言ぞや、之をして下等社會の評言ならしめば乃ち可なり、グラッツ大學教授の口より出で高尙なる學術上の著中に記載せられたるとは、吾人實に之を理解する能はざるなり、其事實は誠に無實痕跡だもなきことなるが故に、益理解することを能はざるなり。然らば實に一痕跡をも有せざるかと云はゞ。余は私に雲上を怨めし氣に眺めて歎止せん。余は實に之の故を以て、默として留まらんか、否余は元より、勇壯なる我が同胞兄弟姉妹が、如斯罵言を歎止せざらんことを論る、諸子以て奈何となす。

時事

○敬慮

松方大臣が上院に於ける演説中、聖名を濫用せりとて、谷三浦の二議員は大ひに憤激せらる、實に尤との事と思ふ、「今の人自から省みて勢威なきとに會すれば則はち聖名を稱す」。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○今　后

今后、十一月に至る迄の間だ世界果して何如に。人は一回浮たる事の經驗を爲しぬ、願はくは少し落着き、深く根底に入るの事業を成したし。人生率々、一夢の間に消ゆ。生れて万世につゝくの義務を盡さず、朝顏の露少時を賴みて木草と共に老死す、人類たるの價値そも〳〵幾干ぞ。

○番　面

新聞雜誌の番面、久しく單調子なるに厭き果てたり、梅は既に咲ひ、鶯の聲聖に近し、文學上の一陽亦た淸らかに來復せんとを待つ。

○鄭　某

「日本」番上に掲ぐる「痛言、悖行」の一篇を見よ、何等慷慨すべきとぞ。輿論苟くも棄つ可からず。淸國公使館も亦決してかゝる人を用ゆ可らず、是れ我國に對するの禮あり。

○ニコライ派新會堂

其獻堂淸めの式に臨む、伽藍宏大、國中第一の建築なるべし、式儀三時間半餘り、或は水を撒き、或は十字を劃き、或は歌ひ、或は祈る、純然佛教の式を觀るの心地す。夫れ希臘教も多くの眞理を含むものなるべし、然れども斯る繁禮縟式を要するの宗教は、我國民に適せざるもの也。

○醫學士社界の議決

大學の醫學士を主とし、其他公衆醫事に念慮淺からざるの國手相合し、日本公衆醫事會なるものを組織す。此頃ろ其第十集議題として「賣淫に關する意見」を議決したると如左、

(一)各個人及社會の眞心は賣淫を不義不正の事となし其絶滅を希望す

(二)賣淫はこれを絶滅することを得べからざれどもこれを制限する道なきにあらず

(三)賣淫に關する事物は社會の表面に顯れ又賣淫者世人に擯斥せられず甚しきに至りては多少の尊敬を受くることあるは現時の流弊にて前條の限制は先づ此弊を除くことより始むべし

(四)賣淫の媒介を廢禁すべし

(五)賣淫を公許して稅を收むるは正常の處置にあらず

(六)花柳病蔓延の主なる元因は賣淫にあり而して監守せざる賣淫に於ては此弊最甚し

(七)賣淫者はこれを市外一定の區域に聚めて監守すべし

(八)監守の下にあらざる賣淫者を發見するときはこれを罰すべし

(九)第七項の處分は三回以上賣淫者として罰せられたるものに對してこれを行ふべし

(十)監守を受くる各賣淫者は少くも毎週一回これを檢査し若し病毒を發見せばこれを一定の公共病院に送致し無代治療を受けしむべし

(十一)賣淫者として罰せられたるものは縱令未だ監守の處分を受付げざるものと雖も臨時これを檢査することあるべし
但し病毒を發見したるときは前條の治療を受けしむべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(十二)賣淫者に藝能を授けこれが爲に悔改の道を開くが如き慈善の事業は成るべくこれを奬勵すべし

(十三)貧家の婦女に職業を授けて自營の道を立てしむるが如き慈善事業を奬勵するときは賣淫者の數を減ずべし

(十四)男女の交際をして嚴正且親密ならしむるも亦賣淫を減少せしむるの一助なり

○醜業者の選擧權

日々新聞に云く、

先日來衆議院へ向け種々請願書を差出したりし醜業營業者(貸座敷主人)の選擧被選擧の權利を剝奪し以て名譽界より放逐せしめんと企てたる諸有志家中には今回是等の營業者に就き自ら其名譽權を放棄せしめんと漸々勸誘し居るものありて府下貸座敷營業者中には既に率先して此名譽權を放棄し再び正業に復したる曉に受授する方然るべしと說き廻るものありといふ。

○女醫

米國第一の新學派大學ジヨンスホプキンスにて、先頃ろ醫學部に女子の入學を許可したるより、女醫得失の問題大に沸騰したり。此國にては、彼ブラックエル姊妹が既に名高き女醫博士となり、世に其功德を及ぼすと淺らずと雖ど、主なる大學にて尙女子醫學生の入校を許さゞりし所ろもありければ、ジヨンスホプキンスの事、扨は大問題の種ともなりぬ。二月のセンチウリー雜誌は、諸名家が之に對するの意見を取集めたるが、皆大ひに之を祝したるとを見る。中に云く、パリス、ゼチバ、チウリッヒ、ベルン、バスタなどの大學又た、ベルジウム、スペイン、イタリー諸國の各大學にて、男女の醫學生を共同に敎ゆるに、絕へて惡結果なし、反つて好結果を奏したる由は、諸敎授が明言する所ろなりと。

○何故に婚姻せざる乎

ガンチツト、ウエルス夫人近頃の論文に、女學生は何故更に多く婚姻せざる乎の理由を窮め、大元因を三つなりとす、云く、慈善、高等敎育、人物識見と。今の女學生甚はだ多く慈善に盡力す、此を以て婚姻を忘るゝ也。今の女學生多くは高等敎育を受け、理想甚はだ高ふして適するものを見ざる也。今の女學生甚はだ綿密に人物を觀識し、崇拜すべき偉男子を多く發見せざる也。蓋し、女は或人と婚せんとを望み、男は婚姻の爲に婚姻せんとを欲す、故に其或人を見出さゞる限り女子は到底結婚を肯んずるとなしと。(ノースアメリカン、レビウ二月分)

ひさご女史新作「車の徹」全篇、並に、押川方義、植村正久、嚴本善治の三氏が、時務に對する慷歎痛切の一長文を次號の附錄女學に掲載す。

通信

可愛子編

●江州通信　○近江婦人慈善會　の犬上支會にては今日迄會員より寄贈せし金員三百餘圓に及びしも別に慈善の働もなく過せしが此度窮民救助規則なるものを編み其規則によりて慈善の實を行はんとて去六日彦根町に於て役員會を開き右規則を議定し不日之を實行するよし。

○産婆免許　縣下に於て昨年末産婆試驗に應じて及第せし田中みつえ外十六名は此程免許狀を得たるを以て夫〱開業せり。

○産婆の欠乏　縣下の舊産婆にして産婆講習所の認可を經ざるものは本年一月一日以後其業を停止せられたるを以て高島郡の如きは現に二十餘名の欠乏を生ぜしかば不便少からず近來他の免許産婆は多忙に奔走せり。

○彦根幼稚園　豫て基督教徒中の有志者の發起にかゝる同園は此度信徒三谷糸女より其敷地を寄附せしため更に一層の奮發を以て有志者を募り遠からず開園するに至るべし。

●京都通信　○師範學校女子部　當府にては女子教員に着眼すると最早く女子部設置の令出づる前已に高等女學校に女子師範學科を設け女子小學教員を養成し來り初等科教員八名中等科教員十二人を卒業せしめたり尋常師範學科令出づるに及んで(廿一年)なる師範學部を尋常師範學校女子部に移して名稱を改め爾後今日まで卒業せしもの二十八人現時生徒數三十四人なり。

○京都高等女學校教員　京都府屬津田儀三郎非職府屬平岡勝五郎尋常師範校助教諭石川辰一郎の三氏は同校教授を囑托せられたり。而して外國人教員エスデール氏は解雇せられたり。

○幼稚保育法の傳習　師範校にて來る四月一日より從來教育に經驗あるもの三名を限り幼稚保育法を傳習するよし授業料は一ヶ月二十錢なる由。

○越路一坐の義擧　二月一日改めて淨瑠璃を興行し當日上り高の中金百圓を京都婦人慈善會へ寄附したる由。

○不具會　下京元五組の兒島牛兵衞氏は片脚隻足の方なるが教育に熱心にて今度不具會を起し同情相憐の意にて互に相助け相救ひて不幸を減ずる道を講究するの目的なるよし。

女報

可愛子編

●皇女御歸京　去二月初旬より神奈川縣下に御滯留中なりし、皇女昌子、房子の兩内親王殿下は、去る七日御歸京遊ばされたり。

●北白川宮妃殿下　は去る三日大磯の別邸より、御歸京。

●貴夫人の參內　松方、大山、後藤、其他各大臣の夫人には、本月五日午後一時より參內し、皇后陛下に拜謁を賜はり、後ち御座に於て、近々催すべき婦人慈善會に關する件に付、協議を遂げられたりと云ふ。

●嶋津公爵夫人　には從者十名を從へ、本月八日、越後丸にて神戸に着、同日相模丸にて上京する由。

●伊藤伯夫人　は去る八日、家眷を伴ひ上京し、帝國ホテルに止宿し居る由。

●入校女學生　本年、東京府より女子高等師範學校へ推選したる女生徒の內、今回同校より入學を許可したるは五人にして、內二人は東京府高等女學校生徒、一人は官立高等女學校生徒、一人は成立學舍生徒、他の一人は就學の場所未詳。

●婦人衞生會の演說　去る七日、京橋區宗十郎町七番地大日本衞生會事務所に於て午後一時より、同會總會を開き、緒方正規、榊叔、兩氏の演說ありたり。

●安生堂産院の義捐金募集　本所横網町二丁目十一番地なる安生堂醫院に於ては新に分娩室を增築し、廣く妊婦の入院を許し、且特に每月十名の妊婦を施貸にて入院せしめんとて、義捐金を募集するといふ、右に就ては贊成者多く、三宮八重野、公爵三浦安子、子爵青木エリサベット、伯爵後藤雪子、子爵土方亀子、伯爵大山捨松、伯爵西鄉清子、公爵三條治子、七貴夫人よりして、慈善舞踏會の寄附金剩中より、金百圓を寄附せられたりと云。

●婦人白標俱樂部の忠告書　去る五日、婦人白標俱樂部の總代佐々木豐壽子より、衆議院議員諸氏に忠告書を贈りたり。

●學生盲啞院に寄附金す　京都師範學校の生徒十名は、盲啞院を參觀し、之を憐むの情堪へず、歸校の後、同志相談し、各自受くる所の手當金の中、男子部より金二圓七十六錢、女子部より金一圓八十錢、合計四圓五十六錢をば、同院に寄附したりといふ、吾人は此に於て、人情の美を見る也。

●京都の婦人教會　は本月七日、五條西洞院長㑹寺に於て開會したり。

●女工の困難　大和木綿とて、同地は綿機の本場なれば、隨て女工多く、大概一年五十機を織る女工は、年に十五六圓の給金、又六十機を織るものは、年二十圓乃至二十二三圓、又八十機を織る上等女工は廿五圓より三十圓迄の給金にて、田舍にては隨分割方よき稼ぎなるが、昨年より本年に掛けては木綿の景氣甚だ衰へ、八十機の上當女工にても一年三四圓ならでは雇ふものなく、下等の女工に至りては、食料ばかりにても絕へて雇口なく、何れも甚しき困窮に陷り居れりといふ。

●女監守　越後高田の監獄には、隨分女囚澤山なるが、女看守二人ありて、之に對し、懇懃懇切、寬嚴宜しきを得、効果亦著しと聞きぬ。

●女生徒に手巾(ハンカチーフ)を織らしむ　高知縣尋常中學校女子部の四年生(即ち一級生)は、先頃より、手巾(ハンカチーフ)を織る稽古をなし居りしが、當時は、餘程上達し、仕上りたる物は賣捌く由。

●北海道の英和女學校改革を行へり　北海道釧路濱曲見町なる英和女學校は、大に改革を行ひ、西洋人を別館に移し、日本人を校內監督主任となし、猶新たに教員を傭聘する都合なりと聞く。

●女教師國に歸らんとす　和歌山地方にありて、久しく働かれたる、グフ井ルド女教師は、病氣療養の爲め、一と先づ其本國亞米利加に歸らんとする由。

●公娼廢止の請願者　京都小崎弘道、人見廉太郎、芝原宗助氏以下、三百七十餘名より、公娼廢止の請願書を、貴族院へは議員吉川三右門氏、衆議院へは、議員中村榮助氏の紹介にて、呈出したりといふ。

●衆議院議員に廢娼書籍を贈る　去る七日、我が社の臟本よりして、衆議院議員へ公娼可滅二百五十部と、正義之反響二百部を贈りたり。

●遠藤源太郎氏果然正業に歸す　福島縣岩瀬郡須賀川なる遠藤源太郎氏は、當地の大白木樓とて、貸坐敷第一等の主人なりしが、感ずる所ありて、客冬十二月中果然として廢業し、斷乎として從來雇ひたる娼妓を放ち、彼等をして再び醜業を營まざるやう教訓して、家に歸らしめ、今は廣く公衆を益する業に當らんとて、活版業を創起するに至りたりと云ふ、人は果斷を貴ぶ、況んや不正を棄てゝ正に歸するをや、全國幾多の醜業者よ、何ぞ速かに遠藤氏に倣はざる。

●貸座敷と娼妓の歎願　東京府下六郡の貸座敷業及娼妓は、其營業高に依て、來る四月一日より課税せらるゝに付、六郡の貸座敷及娼妓百六十五名は連署して、一篇の歎願書を府廳に差出したり、其趣意は無資無產の賤業にして、納税に堪へざれば、之を全廢するか若しくは減ぜられたしと云ふに在り、府廳は目下之か協議中なる由。

●日本婦人保護法案　は去る七日、政府に於て、撤回したり。

●狡譎なる渡航手段　醜業を營む目的を以て、海外に渡航する婦女子を取締ること、近日漸く嚴重なるより、狡譎の輩は種々に工夫を凝らしたる末、渡航をなさんと欲する婦女と、結婚したる事になし、公然其趣を以て入籍地の町村役場に出し、それより縣廳へ向て夫婦海外渡航免狀を願出で、幸にも免狀の下附あるや、直に目指す異域に到り、其計謀全く成就するを見、早速離緣の手續を爲し、女子のみ彼地に置去りにし、男子は早くも歸朝して、更に此の惡手段を以て、新陳代謝し、幾人となく婦人を渡航せしむるものありと、惡むべき狡兇なる哉。

●カルチヤー夫人　曾て重病に罹りし時、其友人は大に心配せしが幸にして追々快方に向ふと聞く、夏期ともならば亦例の如く渡航せらる可し。

●八丈島風俗雜談　は國會新聞上に續載せり、同地婦人の有樣など悉しく記しぬ。

●三月四日峰岸三郎氏より本社への來翰に曰く「近來御發刊の貴紙上に於て野生が束髮は國体に關する旨を演說せしとて其非なる所以を御辨明相成候趣傳聞致候處此の論難の勞を執り給ひし段は至極御尤に存候然れども是れ全く誤報によりて此の如き次第に立至りしものと被相考候何となれば野生演說の趣旨たるや本邦にて歐米の風俗に摸倣せんと欲するに際しては須らく其利害得失を明かにして然る後取捨すべきものと云ふの意にして其一例として束髮の得失に論及したるまでにて有之決して束髮を以て國体に關するなどの趣旨に無之候間爲念此儀正誤申入候匆々」由て玆に正誤す。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

品名	三月十一日
白米（一円ニ付）	
一等米	斗升合 九七
二等米	一〇〇
三等米	一〇四
四等米	一〇六
五等米	一一〇
正米（一円ニ付）	
越中米	斗升合 一四〇
美濃米	一三八
尾張米	一三七
肥後米	一三五
一志米	一三六
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	斗升合 二三〇
上州小麥	一四八
竹林麥	一二五
梅澤大豆	二〇〇
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一四〇
白胡麻	一三二
黑胡麻	一四〇
鹽（一円ニ付）	
赤穗	俵 二四七
大鹽	二五七
本齋	四〇〇
新齋	四二〇
醬油（一円ニ付）	
最上	樽 八分一厘
極上	九五
上物	一四〇
中物	一九〇
並物	二四〇
味噌（一円ニ付）	
地製上白	貫 六、四〇〇
同上赤	六、五〇〇
同紅赤	四、六〇〇

品名	三月十一日
吳服（一反ニ付）	
御召縮緬	円 八、五〇〇
糸織	七、〇〇〇
一樂織	八、八〇〇
結城紬	五、五〇〇
節糸織	五、二〇〇
本八丈	六、八〇〇
琉球紬	五、五〇〇
銘仙	三、五〇〇
奉書紬	四、〇〇〇
七々子	六、三〇〇
縞珍織	二五、〇〇〇
本國織	一五、〇〇〇
唐繻子	一〇、五〇〇
博多織	一〇、五〇〇
仙臺平	七、三〇〇
裏地類（一疋ニ付）	
花色糸吉絹	円 七、二〇〇
花色秩父絹	四、三〇〇
本紅絹	六、三〇〇
紅秩父絹	三、二〇〇
色甲斐絹	五、七〇〇
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	反 三、五五
綾鶴	三、八五
日ノ出鶴	四、二一五
若柳	三、二〇
白梅	三、八〇
改メ	三、五七
開銘	三、八七
綿絲（一円ニ付）	
新坂上銘	七八〇目
同京丹大入	八〇五
同坂丹大入	八一五
同三州上銘	八二〇
同三州文庫入	八七五

品名	三月十一日
眞綿（九貫目ニ付）	
上入金	円 一三〇、〇〇〇
並入金	一二五、〇〇〇
無銘	一二〇、〇〇〇
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀頭	円 二、四五
同大頭	一、九五
同小頭	一、六五
同中茶	一、二〇
狹山稀頭	一、八〇
同大頭	一、四五
同中頭	一、三〇
同中茶	一、〇〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎極上	円 一、〇〇
大森極上	一、〇〇
深川砂村極上	一、〇〇
大師湖田極上	七〇
炭（一円ニ付）	
伊豆上	俵 四、五〇
同中	四、八〇
同下	五、五〇
丸備上	三、一〇
角備上	三、八〇
水油（一樽ニ付）	
地水	円 八、〇〇
胡麻油	一〇、〇〇
荏油	一一、〇〇
桐油	六、八〇
綿油	七、七〇
坂水	九、一〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	円 一、六五
デボース	一、六四
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六一

婦人問題演說會

三、四、五、六の四ヶ月間本鄕弓町壹丁目二番地壹岐坂會堂に於て婦人問題及び敎育問題に就て演說を催ふす殊に貴婦人の貴臨を希望す第壹回は來る三月二十一日午後正四時より開會す演題は「女子の運動區を擴張するの利害」にして辨士はボルヤーン氏なり

右に付き御用の御方は神田區中猿樂町十七番地ミスヂルクスまで御申越を乞ふ

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ**百卷**をば僅に**一圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生する分**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ、買入を要する八十冊にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子敎育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小説とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本 五十錢 郵税六錢
並製淡裝 三十五錢 同 四錢

正月の稽古に宜し 遺物に宜し
歌留多遊びに宜し 詠歌に宜し

女學雜誌社

醫科大學産科婦人科及小兒科病室參考書
郡馬縣其他師範學校高等女學弁小學用書
醫學士三島通良先生著

はゝのつとめ

親の巻　妊婦産婦の心得　定價金三十錢（郵税二錢）

子の巻　日本育見法　定價金四十五錢（郵税四錢）

右は我國無雙との好評を博したる母子衞生書なるが今般增補訂正の上再版したりクリスマス婚姻出産の贈物としてもこよなき好品なり。

書肆　通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通塩町中央堂。

下六番町　女學雜誌社

自由平等經綸

毎月二回（一日、十五日）發行

●本誌ハ自由主義ノ機關トシテ發行スルモノナリ
●本誌ノ價値ハ天下ノ公評ニ任ス自負自贊ハ眞個ノ價値ヲ益スコ能ハザレバナリ
●本社々長ハ新井章吾主筆ハ中江篤介之レニ任ス
●社員トシテ生原盛之、河島醇、三崎龜之助、外數名熱心筆ヲ執ッテ盡力ス
●客員トシテ坂垣退助、星亨、大井憲太郎、河野廣中、中島信行、松田正久、鈴木昌司、特別寄書家トシテ名士大家數十名奮テ助力セラル

壹部前金六錢五厘十部同六十二錢廿部同壹圓廿錢外ニ郵税壹部ニ付五厘●郵郵切手代用ハ五厘劵ニテ壹割增前金ニアザラレハ一切發送セズ

發賣所　東京神田區雉子町三十二番地　經綸社　團々社書店

敬宇中村正直先生序　經濟雜誌社編輯
編輯主裁　田口卯吉君　川上廣樹君

●新版 日本社會事彙

上巻　定價金八圓
下巻近刻　定價金八圓

此書ハ國初ヨリ明治ノ今日マデ政治、制度、法律、理財、商業、工藝、風俗等、百般ノ沿革ヲ統記シ頭字ノ今日ニ存スルモノ大約之ヲ五十音ニ分チ索引ニ便ナラシメ且ツ圖畫ヲ挿入セシ國家無二ノ寶典ナリ

田口卯吉君序
石川暎作君、嵯峨正作君、金谷昭君、三木寶君、伴直之助君、合譯

●泰西政事類典

再版　全五冊　正價金拾貳圓

右ハ原名「ポリチカル、サイクロペシア」ト題シ英國ヘンリー、チー、ボーン氏ノ編纂ニ成ルモノニシテ行政、經濟、財務、商業、法律等ヨリ交際上ノ諸項ニ至ルマデ上、羅馬、希臘ノ往昔ニ溯リ下、今日ノ現狀ヲ審カニシ原委沿革ヲ歴敍シ政治ノ事項殆ンド網羅シテ遺ス所ナク政治域内ノ諸科ニ通曉スルニ於テハ即チ復之レニ若クモノナキ書ナリ

田口卯吉君著

●自由交易日本經濟論

再版　全　正價金廿五錢　郵送料金四錢

此書ハ最初ニ自由貿易ノ眞理ヲ闡明シ保護税ノ弊ヲ駁撃シ遂ニ現時日本ヲ繁榮ナラシムルハ自由交易ニアルコヲ論述シタルモノナリ

發兌　東京市京橋區彌左衞門町七番地　經濟雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

☞●衛生化粧用芳香入艶出 花王しやぼん

内務省免許藥劑師 瀨戶末吉先生發明
農商務省前分析課長工學士 高峯讓吉先生試驗
東京愛生病院副院長 中村重治先生實驗

本品はいかに粗皮の御肌と雖も第一に色を白くし美艶肌となりにきび●そばかす●はたけ●あせぼわきが●たむし●ひゞ●しもやけ●できもの類總て皮膚一切に奇効あり●品質及効能は前記の先生實驗の上證明せられたる物なり總て説明は本能書にくわしくあり

東京府衛生課免許

本品は大に貴孃紳士の好評を蒙りたる物なれば世上有觸れの云々石鹼と同視する勿れ(定價一個十二錢桐箱入三個三十五錢)各地和洋小間物店及賣藥店に販賣仕候最よりで御求を乞

製造發賣本舖 東京市馬喰町一丁目洋物廛 長瀨富郎

右定價御送附次第實地廣告の爲當分郵税弊店持にて郵送仕候

弊社福音週報の儀過般發行禁止を命ぜられ愛讀者の好意に負むくことと茲に日ありしが此度更らに其筋の許可を得來る廿日を以て**福音新報**と題する雜誌の初號を發刊し從來の如く愉快にして且つ有益なる事項を掲載することと勿論今後殊に**泰西神學界の動靜**に意を用ひ愈奮勵して余輩の責任を盡さんとす願くは益々愛讀を賜へ

東京麹町區三番町拾番地 舊 **福音週報社**

追ふて本社を福音新報社と改稱す

毎月一回刊行 **普通衛生雜誌** 明治二十四年二月廿八日發行第三卷第二號目次

論說 傳染病の豫防並治療に就て…醫科大學教授醫學博士緒方正規君●黴毒の豫防に就て…醫學士關場不二彦君●一二民間藥の結核バチルレンに對する關係…醫科大學衛生學教授橋本清敏君●衛生の進歩(其五)…醫科大學衛生學室安原豐也君

新報 歐洲小兒死亡數●萊因州の結核病化●汚水清澄藥●衣服料の砒素●酒と茶と●糞尿排泄の量

社說 虎列剌病と醫業停禁

雜錄 普國々會に於てコック氏に關する文部大臣の演說…醫學士F・Z・S・君●蓬砂を加へて炊きたる飯●糞尿及下水の消毒及防臭●本邦の牛乳は脂肪に富む…S・F・君●信天緣の肉へ油

學會紀聞 大日本私立衛生會傳染病豫防消毒心得書

彙報 コッホ氏注射藥到着の期將に近きにあらんとす●コッホ氏療法彙聞●コッホ藥に關して●內務省衛生局●萬國衛生會●列國火葬會●梅毒病院●東京病院●府縣衛生等

定價 一冊六錢郵稅五厘半ヶ年前金郵稅共三十七錢一ヶ年前金同七十四錢

發行所 東京日本橋區蛎殼町二丁目十四番地 **普通衛生雜誌社**

定價			
一冊。	六錢	郵稅。五厘	(但府內無郵稅)
十一冊。	五拾八錢	郵稅。五厘	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

東京市麹町區下六番町六番地

發行所 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該商中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す

(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上げ臂向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送賃廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械ブラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上ゲ臂二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送賃廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正當の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時さ旣に御購求の後に在るさに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限さす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價さす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりさも同種にして新規なる者さ交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらす**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製

(金側)十八金廿一形無雙絹龍卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(銀側)同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製

(金側)十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニッケ、卷上げ臂向ひ爪左アンクル二番ゟ惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●(銀側)廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上ゲ臂向ヒ爪左アンクル總石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニッケル卷上ゲ臂向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計

(金側)十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品

鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環

金齒金製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品

腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なるこさその構造の精緻なるこさその裝飾の美麗なるこさ何れも世間の好評に違はさる眞品なり尚且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりさ云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個每に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却さも購客の望に任ずるさ云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個每に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂(京橋區尾張町二丁目十八番地)ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレハ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ヒ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中に就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個每に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還さも凡べて其の望み通りに任かすさ云へは、購買者に取ては至極便利なりさ云ふべし。

東京市京橋區尾張町
二丁目十八番地

天賞堂